

随 筆

貴重な水辺のいくつか—8

ペテルゴフ夏の離宮

亀田 泰武*

1. はじめに

1703年、何もない沼沢地にピョートル大帝が建設を始めたサンクトペテルブルクにはエルミタージュ美術館、夏の離宮ペテルゴフ、エカテリーナ宮殿と呼ばれるツァールスコエ・セローとすばらしい文化遺産がある。近代化が遅れたロシアが一等国として認められるべく、莫大なお金をつぎ込んだ。夏の離宮は他に例のない規模の噴水で、大噴水のある大滝や、様々な形状の噴水が至るところにある。この辺は北緯60度で長いカムチャッカ半島の根本くらい北になる。平均気温は網走くらいで、一番気温が高い7月の平均気温が18度と東京の5月程度。一年の大半が寒冷で、肌寒いときに一層寒さを感じるところである。

フィンランド湾はバルト海の奥に位置し、東方向に入り込み長さ400km幅120kmあり、南岸6割くらいはエストニア領、また北岸6割くらいはフィンランド領。

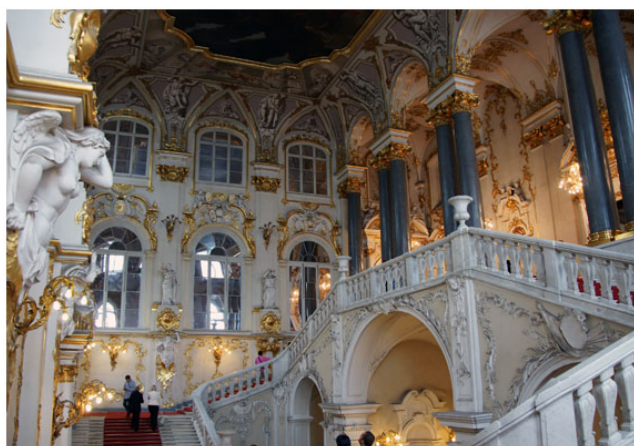


写真-1 大使の階段（エルミタージュ美術館）
かつては皇帝に謁見する大使達が使用。今は2階に上がる最初の階段で、大変豪華。

首都ヘルシンキも湾に面していて、ヘルシンキとサンクトペテルブルクの距離は約300km。フィンランド湾の一番奥にネヴァ湾があり、湾入り口にあるコトリン島から30kmくらい入り込んでいる。戦略上重要なコトリン島にはクロンシュタット要塞があり、バルチック艦隊の基地になっていて外国人は長らく近づけなかった。

2. 夏の離宮（Peterhof Palace）

サンクトペテルブルクから30分のフィンランド湾を望む海岸につくられた。段丘の上に建つ宮殿を挟んで下の庭園と上の庭園がある。



写真-2 王宮から運河を見おろす

1710年にクロンシュタット要塞とサンクトペテルブルクの間の停泊地にピョートル大帝が館を建てたことから始まる。段丘が海に迫っているこの地形に注目した大帝はここに水を活かした宮殿を構想し、建設にはフランス、イタリアをはじめ世界中から優秀な技術者が集められた。大帝自身も積極的に関与し、指図し、大帝の手書きの設計図面が十数枚も残っていると

のこと。



写真-3 運河から王宮を見る

宮殿と庭園の一応の完成式典が行われたのが1723年で、大帝の死のわずか2年前であった。模範となったヴェルサイユ宮殿は噴水ができ、おおかたの形ができあがった1682年であり、当時は太陽王ルイ14世（1638－1715）の治世下であった。なおヴェルサイユ宮殿も、噴水と導水工事に宮殿より多くのお金が使われたとのこと。

大宮殿は高さ16mの段丘の上に建ち、海を見ているような宮殿正面には斜面を利用したカスケードと噴水があり、約600m先の海から運河が宮殿の前までできていて、運河の脇にも噴水が並んでいる。下の庭園は運河を挟んで海沿いに東と西に各々約1km内外広がっていてその幅は東は600m、西は400m。庭園の中に小さな宮殿や噴水が配置されている。離宮の面積があまり広すぎて、通常の半日コースで見学できるのは大宮殿と運河東の噴水群とモン・プレジール宮殿くらい。

上の庭園は宮殿の南に面し、幅300m、奥行き400m程度と下の庭園に比べて規模は小さいが整然としたフランス庭園になっている。庭園のすぐ南には上の庭園より広いオリジン池がある。

離宮は第二次大戦中、ドイツ軍に占領され、噴水や建物が相当破壊された。戦後から今日まで修復作業が続いている。

夏の離宮はサンクトペテルブルグから少し離れていて、観光シーズン中はエルミタージュ美術館から高速水中翼艇が往復していて、航行時間は30分であるが、宮殿まで直接行ける他公共輸送はなく、宮殿入場券購入など個人では難しいらしい。



写真-4 大滝の全景

噴水が両脇に上がる2列のカスケード。階段には金色の像が。中央にはグロット。

3. 大滝（Grand Cascade）

段丘を利用して、カスケードと噴水群が宮殿を飾っている。カスケードは中央の空間を挟んで2対あり、7段で、金箔の像が並び、カスケードの各段の両側から噴水が出ている。噴水は噴き出てくる高さは違うが、頂点は揃っていて見事である。左右のカスケードの間の空間には真ん中に噴水があり、彫像やレリーフが置かれている。後ろの建物はグロットと呼ばれ、2階建てで、今は噴水の歴史展示室になっているが、昔は客人を驚かせる趣向の部屋であった。

カスケード前の円形池の中心には一際大きな噴水がある。サムソンの噴水で、ライオンの口を引き裂く金色のサムソン像とライオンの口から一段高く上がる一本の噴水を中心にして回りから放射状に噴水が出ている。当初の設計ではサムソン像は考えられていなくて、賓客は海から運河を船で入ってきて、その際、運河両



写真-5 サムソン像と噴水

脇の噴水の列に囲まれつつ、正面に位置する段丘のカスケードとその上に建つ宮殿の偉容を見せられながら、宮殿の前の円形池で下船するというように設計されていた。

最初のサムソン像はスウェーデン戦勝利を記念して1734年につくられた。勝利した日が「聖サムソン」の日だったこと、またスウェーデン国旗にライオンが描かれているのでスウェーデンを意味するとしてサムソン像が選ばれている。

大滝のスケールは大きく、37の像、64の噴水、142の水吹き出し口がある。

4. 噴水群の水

夏の離宮にある多数の噴水はポンプを使わず、上流からの水圧だけで上がっている。これを担当したのがロシア人技師のワシリー・トゥヴォルコフで、最初の噴水が上がったのが1721年であった。



写真－6 カスケードの噴水

日本で現存する日本最古の噴水は、兼六園の瓢池に残っている。兼六園の本格的整備に取り組んだ12代藩主前田斉泰が金沢城の二の丸に噴水を上げるため、試作した際に一緒につくったらしい。城内に噴水が上がったのは1861年7月で、瓢池の噴水も同時期につくられたものと考えられている。この百年以上前に、桁違いに規模の大きい噴水がつくられたことは、国力の大きな差を感じる。

離宮の水源は22kmも離れたところにあり、噴水にいたるまで水圧をどう保持するかが課題であるが、16m高い上の庭園まで水路で運び、そこからパイプで流せば距離が短くなり、そんなに難しくなく見える。カスケードの多数の噴水は皆、段丘の高さより少し低い高さに上がっていて、高さが見事に揃ってい

る。一方、上の庭園にも噴水があり、またサムソン噴水の高さは20mと段丘よりも高く、これらの噴水の水は上の庭園より4km上流の高いところからパイプで引いている。圧力管の距離は長くなるが、段丘のおかげで低圧で済むことになる。こういう工夫を見ると、動力ポンプと耐圧管のありがたさがわかる。

また、文明の利器がない状態で、大量の導水、凍上などの課題に対し、工夫して大規模な噴水システムを作り上げたことは素晴らしい。

離宮の噴水は一回使いだけでフィンランド湾に流れる。水使用量はざっと見て毎秒1トン。夏の間だけの運転であるが、40万人の都市の水道使用量に匹敵する。農耕も難しい寒冷地なのでこういう贅沢な水の利用ができるのであろう。

噴水は真っ白であるが池や流れる水は少し茶色がかっていた。寒冷地特有の植物が完全に分解されず、有機物が少し残っているためである。



写真－7 アダムの噴水

5. その他の噴水

庭園には芸術的なものや遊園地にあるようなものなど様々な趣向を凝らした噴水がある。

○アダムの噴水

二つ並んだ小さな建物の前の池にある、円形に配置された何条もの噴水が放射状に吹き出して王冠のような景観の普通の噴水。中心に像がある。運河の東にあり、西の対称点にはイヴの噴水がある。

○ローマの噴水

花壇のなかにある陶板のような感じの2段の塔の上から噴水が上がっている。道路を挟んで同じものが対になっている。

○フランスの噴水